

2025 年度

2/1 入学試験

国 語

注 意

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 放送の指示にしたがって、問題冊子に受験番号・氏名を記入します。  
次に、解答用紙の指定された場所にQRコードシールをはり、受験番号・氏名を記入します。
3. 試験時間は 45 分です。
4. 問題は、1 ページから 18 ページまで印刷してあります。試験が始まったら最初に確認し、足りないページがあったら申し出てください。
5. 答えはすべて解答用紙に記入してください。
6. 試験が終わった後、問題冊子・解答用紙とも回収します。
7. 記述問題では、指定された字数の 8 割以上は書いてください。ぬき出し問題では、指定された字数で答えてください。どちらの場合も、句読点やかぎかっこなどの記号も字数にふくまれます。

共立女子中学校

受 験 番 号	氏 名
A	

1 次の1～8の――線をつけたカタカナを漢字で、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- 1 トロウに終わるかもしれないが、ここであきらめたくない。
- 2 ゴウに入ってはゴウに従えというので、まずは言われたとおりにしてみよう。
- 3 私たちにはとてもまねできないゲイトウだ。
- 4 上着のウラジには高級な布を使う。
- 5 元気に食事をする姿に、回復のチヨウコウを見た。
- 6 アンカーが五人を抜く力走を見せた。
- 7 ことの外、この問題には時間がかかった。
- 8 よい商品がないか、お店の中をじっくりと物色する。

〔2〕 平安時代に作られた本の中には、中国語である漢字を日本古来のことば（和語）に変換<sup>へんかん</sup>して読むための辞書のようなものがあり、左の例のように書かれています。その本で次の1～4の漢字を探したときに、どのような和語が出てくると考えられますか。A～Dの中からそれぞれ一つ選び、記号で書きなさい。ただし、かなづかいが現代のものに変えています。

（例）

根  
ハジメ

1 貨  
A ツクル  
B ホシ  
C タカラ  
D ウデ

2 忠  
A ナオス  
B ツゲル  
C メグミ  
D マコト

3 評  
A オコル  
B ハカル  
C ナオル  
D ハサム

4 縦  
A ハナツ  
B スワル  
C トザス  
D ミル

③ 次の詩は「初心者のための詩の書き方」という連作の中の1と9の作品です。詩と鑑賞文を読み、後の問いに答えなさい。

1

とても好きなものは

詩にできない

そのものが言葉よりも近いから

そういう時は詩なんかいらぬ

詩にできるのは

あるときとても好きだったもの

あるとき

というところが肝心

ある時点で意識から遠くへ放り投げられ

そんなものはもうどうなったってかまわないと思う

その「どうなったって」が詩になる

いまとても好きなものなんて

たいてい何の意味もない

ほんとうにせつなくなるのは

とても好きなものがそうでなくなる瞬間

そこにうすい膜がはりつめていて

それを通り抜ける瞬間なんだ

どうしてそうなるのかはわからない

わからないところを見つめて生きていけってことなんだ

9

詩を書いていると

新しいものを生み出しているというより

もとの形に戻しているような感じがする

特によい詩が出来た時には

もともとあった詩に

散らばっていた言葉をはめ込んだだけのよう気がする

だから

詩が完成した時に

それがどれほど懐かしく感じられるかによって

完成度がわかる

(松下育男『松下育男詩集 現代詩文庫』思潮社による)

鑑賞文

詩人はこれを「初心者のための詩の書き方」と題して、百編の詩を連ねています。ここで語られるのは、「詩の書き方」であるはずですが、むしろ「詩とは何か」という問題が語られていきます。なぜなら、  
 ここで語られる詩とは、なんとも矛盾に満ちた、思うようにはいかないものです。「とても好きなもの」を詩にしたいと思っても「詩にできない」し、「新しいものを生み出」そうとしても「  
 ②」のです。思うようにならない歯がゆさや、  
 せつなさがおしる詩を書く力になっているとも言えます。

たとえば、幼い頃に好きだったぬいぐるみ。一緒にいないと眠れないほど、好きで好きで仕方がなかったそのぬいぐるみも、いつの間にやら忘れ去ってしまったけれど、でもそのぬいぐるみを思い出すと胸がしめつけられるような思いになる。こんな時、そのぬいぐるみはきつと詩になることでしょう。自分が大きくなった、成長したのだということは簡単ですが、その自身の変化とはいったいどのようなものなのでしょう。それは「  
 ③」

③「を経なければ、そのものを大好きなままの自分では「詩」を書くことはできないということになります。

また、文芸作品を創作するときには、オリジナリティ、新しさがもとめられるはずですが、この詩人の創作行為は「  
 ②」と語られます。夏目漱石の『夢十夜』という作品に、運慶という昔の有名な仏師が仁王像を彫っているのを見た男が「あの通りの眉や鼻が木の中に埋まっているのを、  
 ④」と語られます。一方で、それが創作であるという矛盾があるのです。

新しい詩を書くためには、新しいことを求めているいけない、この矛盾に初心者の詩人は苦しむのでしょうか。  
 ⑤この自分も通過した詩の創作の苦しみを初心者に向けて「詩とはこういうものだよ」とやさしく語りかけている詩人の姿が目に見えます。

1 ① にあてはまる表現としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 初心者に「詩とは何か」と伝えることが、詩人の使命といえることだからです。

イ 初心者には、「詩とは何か」を考えることはできないからです。

ウ 初心者と作者にとって、「詩とは何か」を考えることは、「詩の書き方」よりも大切だからです。

エ 初心者に「詩の書き方」を伝えることは、どのように努力しても不可能なことだからです。

オ 初心者にとって、「詩をどう書くか」という問題は、「詩とは何か」という問題だからです。

2 ② には9の詩の中のことばが入ります。詩の中から十字で探し、初めの四字を書きぬきなさい。

3 ③ には1の詩の中のことばが入ります。詩の中からふさわしいことばを四字以内で書きぬきなさい。

4 ④ 「それが創作であるという矛盾があるのです」とありますが、これはどのようなことを言っていますか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 詩人の仕事は自分の力で新しいものを創ることなのに、もともとあった詩のように感じるほどよいということ  
イ 新しい詩を創作することは不可能であるので、聞き覚えのある懐かしい詩を書くことしかできないということ

ウ 新しい詩を創れば創るほど、詩は古びた懐かしいものになり、よい詩ではなくなること

エ 新しいかどうかは詩作に関係などなく、よい詩というのはただ偶然的にしか生まれないということ

オ 詩作とはもともと存在する言葉を利用するもののに、言葉が新しくなければよい詩にならないということ

5 ⑤ 「この自分も通過した詩の創作の苦しみを初心者に向けて『詩とはこういうものだ』とやさしく語りかけている詩人の姿が目につかびます。」とありますが、これはどのような「詩の書き方」を教えていると考えられますか。次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア できるだけ今まで書かれた詩と似せることをめざして詩の創作をすべきだ。

イ 詩の完成度を高めるために自分が夢中になれる、ありふれたものをテーマとして選ぶとよい。

ウ 詩の創作とは、感情移入をせずに偶然目にしたもののありのままを書くべきだ。

エ 詩は「新しい」ということだけを目指して、表現上の新奇さをめざして書いてはいけない。

オ 詩の「言葉」は、みんなが理解できるように平易で古い言葉づかいをするべきだ。

4 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

数校合同でのバレーボール部練習合宿に参加していた明鹿高校の「僕」は、一か月半ほど前に怪我をして以来どうすれば元のようなプレーにもどれるかなやんでいた。「僕」と同じ高校のエース「遊晴」は、稲村東高校の主力選手「和泉」と同じ中学出身であった。そんな中、強豪稲村東高校との練習試合で惨敗した「遊晴」に対し、「和泉」は「がっかりさせないでほしい」と冷たく言い放つ。明鹿高校と稲村東高校との練習試合は翌日にも予定されている。その夜、合宿所の洗面所に一人でいた「僕」は、偶然「和泉」と鉢合わせし、「和泉」が「僕」に話しかけてきた。

「明鹿の、<sup>注</sup>何セットかライトで出ていた選手か」

水音に混ざって、声が飛んできた。

慌てて和泉の方を向いて、口の中がまだ歯磨き粉だらけだと気づく。僕の顔に注がれる視線を痛いほど感じながら口をゆすぎ、スウェットの袖で口元を拭こうとすると、

「洗面所に来るときは持っておくべきだ」

と、和泉はタオルを差し出してくれた。

「……ありがとうございます」

こわごわとタオルを受け取る。和泉はポケットから別のタオルを取り出した。

「君も二年生だろう？ 俺も二年だから、タメ口でいい。稲村東の和泉だ、よろしく」

「明鹿の宮下、です。よろしく。タオルありがとう」

ごしごし拭くわけにもいかないと思って、タオルは口元に当てる程度にし、すぐに畳んで返す。和泉は、感情を感じさせない目でそれを見下ろし、

「使った面を内側にして畳んでなかったら、俺は別の洗面所を探していた」

と言って、受け取った。直後マスクの下から、くつくつと聞こえてくる。ぎよつとしたが、どうやら笑っているらしいと気づいて、それで冗談だったんだとわかった。

話しやすい人では決まっていけど、少なくともいまは、タ方の遊晴のように「がっかりだった」とか言われる心配はしなくてよさそうだった。

① 「よくわかったね。僕のこと」

それで僕は、歯ブラシに歯磨き粉をつける和泉に言った。会話の糸口というわけだけでなくて、本心だった。何セットかライトで出ていた、と言われて僕は心底驚いていた。

「明鹿は<sup>注</sup>春高予選で見てる」

和泉は平然と言う。「それに、バレーしている人間の顔は基本的に全員覚える」

そんなまさか、と笑ってしまいそうになるが、和泉なら本当に全員、相手校の選手をレギュラーはもちろん、ベンチまで記憶していたとしても、おかしくないかもしれない。やりかねない、と思った。

「そういうえば、さっき食堂でミーティングをしていたな」

和泉はマスクを外しながら言った。「今日の話か？」

「まあそんなところ」

全部説明すると長くなるし、和泉は遊晴が「勝ちに行く」と言った相手だ。話したら手の内を明かしてしまうようで、僕は適当に言葉を濁す。

でも、和泉に聞いてみたいことはあった。

「さっき、中学のときの遊晴の話を初めて聞いた。なんで明鹿に來たのか、とか。和泉くんも知ってた？」

ああ、と和泉は頷いた。

「俺も卒業前に聞いた。そのときは、そういう選択肢もあるのかって驚いた。ただ、どうせ高校でも結局バレエをやるんだろうとはわかっていた」

「へえ」

「あいつは、根っからのバレエ馬鹿だろう。あそこまで楽しんでバレエする奴を、俺は他に見たことがない。だからバレエを辞めるとは到底思えなかった」

② 和泉くんは遊晴と全然タイプが違った、とも聞いた」

合宿前に遊晴から聞いた話を思い出していた。和泉隆一郎はとことん負けず嫌いで、誰かに劣っていることが受け入れられない性格で、だからたとえ部内で浮いても、努力し続けた。そうだな、と和泉は口許を歪める。苦笑したらしかった。

「まあ俺にはわからなかっただけで遊晴も内側にはいろいろ抱えてたんだろうが、だけど中学時代あいつを見ていて、自分が思い悩みながらバレエやってるのが、何度も馬鹿みた

いに思えたな」

今日の試合での和泉の姿が浮かぶ。自分の上げた注3トスをチームメイトが打ち切って、チームの得点になる。しかし和泉は無感動な様子だった。それは冷静というより、いま思いつく返すと機械的とも言えた。

僕と和泉は、バレエしてて楽しみなさそうなところがちよつと似ている。

この前、遊晴はそう言っていた。

「和泉くんは」

高校バレエ界の注目選手といつの間にか落ち着いて会話できていることに気が大きくなったのかもしれない。それに、隣で歯ブラシを持つ和泉は少しだけ無防備に、普通の高校生らしく映っていた。

③ 「バレエしてるとき、どんなことを考えてる？」

誰になにを訊いているんだ、と、すぐに後悔と恥ずかしさが押し寄せた。しかし引ひ込みがつかなくて「無心ではない？」と質問を足してしまう。

昨日も今日も、試合中の僕は考えすぎていた。でも、怪我する前は違った気がする。意識は無心というか注4フラットな状態で、ほとんど自動的に身体は動いていたような。それが遊晴の目には楽しみなさように、かつ和泉と似ているように見えるのなら、この質問は聞いておかねばならないと思った。

「試合中という意味でいいか？」



和泉は齒ブラシを持ったまま、じっと鏡を睨みつける。僕が頷くと、

「それなら、無心ではない。無心はありえない」

と、言い切った。

「もちろん、思い悩むこともしない。反省や後悔は雑念だ。修正だけすればいい。試合中に必要なのは、雑念を排除した上で思考し、行動を最適化することだ」

「最適化？」

「八秒だ」

和泉は鏡越しに僕を見据えた。意味を掴もうとしたけど、すぐにはわからない。

「……笛が鳴ってから八秒以内にサーブ打たないといけない、ってルールの？」

違うだろうな、と思いながら口にした。案の定、和泉は首を横に振る。

「俺が言ってるのは、もう一つの『八秒』だ。聞いたことないか」

「うん、たぶん知らない」

「バレーボールにおいて、点が決まってラリーが途切れ、次のラリーが始まるまでの時間。それが、だいたい八秒くらいだと言われている」

初めて聞く話だった。ラリー間が何秒かなんて考えたこともなかった。

点数が決まってから、試合再開の笛が鳴るまで。得点に喜

んだり、サーブレシーブの陣形に移動したり、サーブを打つ選手にボールを渡し、ボールを受け取ったサーバーが床にボールをついたりする時間だ。言われてみれば、八秒くらいかもしれない。

「で、その八秒が？」

「その八秒間で、考えるんだ」

頭をフル回転させる、とも和泉は言った。「次のラリーで生じうる可能性について、この短時間ですべて洗い出して検討する。そのときの注6。ローテーション、ポジション、事前のデータとその日の相手の調子と傾向、自分の調子、味方の調子と傾向。それらをもとに八秒間で考える。パターンを整理して、次の行動を最適なものにする。ラリー中の判断速度が極限まで高まるように」

和泉にとっては当たり前にやってきたことなんだろう。その淀みない自信に満ちた口ぶりから、そして試合中彼の坊主頭の中で無数の思考が渦巻いている様子を想像して、これが一流の選手か、と圧倒される。

でも同時に、僕にもできそうだと、とも思っていた。少なくとも、試すことはできそうだった。ラリーとラリーの間の八秒で、反省とか後悔とか余計なことを考えず、次のプレイの予測を立てる。そんなふうにはバレーする自分は割と簡単にイメージができて、無心になることより、ずっと簡単に思えた。

「反省や後悔は、試合が終わってからだ」

和泉は言った。「存分にやればいい。悩んだり、苦しんだ

りはコートの外でやることだ」

「いまの和泉くんでも悩んだりするんだ」

⑤ 和泉の喉元<sup>のどもと</sup>からまた、くつくつと聞こえた。

「悩んでばかりだ。自分が下手くそだと思っことも、今日はバレエしたくないなと思うことだってある。ときどきじゃない。頻<sup>ひん</sup>繁<sup>ばん</sup>にある。バレエを始めてからずっとそうだ。同じことの繰<sup>く</sup>り返<sup>かえ</sup>しだ。ただ、俺はそれでもいいと思うことにしている」

和泉はゆつくりと続けた。

「悩みながら、もがきながら、それでも決してバレエを離<sup>はな</sup>さないやつが一番強い」

⑥ ばかり、と頭の奥<sup>おく</sup>でなにかが弾<sup>はじ</sup>けた感覚があった。正体はわからないけど、ポップコーンがフライパンの上で一斉<sup>いっせい</sup>に飛び跳<sup>は</sup>ねるような、スイッチが切り替<sup>か</sup>わって一瞬<sup>いつしん</sup>のうちに広い部屋の隅々<sup>すみずみ</sup>まで照明<sup>しやうめい</sup>が灯<sup>とも</sup>るような、そんな感覚だった。

「なんだか堅<sup>かた</sup>い話<sup>わ</sup>をしてしまったな」

和泉は手に持っていた歯<sup>は</sup>ブラシをようやく、口に含<sup>く</sup>んだ。

注1 何セットかライトで出ていた選手 Ⅱ 試合の一部だけにライトのポジションで出ていた「僕」のこと

注2 春高予選 Ⅱ 毎年春に行われる全日本バレーボール高等学校選手権大会の予選

注3 トス Ⅱ 味方選手が強く打ちこめるようにボールを上げること

注4 フラット Ⅱ 落ち着いている

注5 ラリー Ⅱ サーブが打たれてから点が決まるまでの一連のプレーのこと

注6 ローテーション Ⅱ バレーボールの試合中に選手のポジションが順番に回っていくこと

注7 発破 Ⅱ 強い言葉で激励<sup>げき</sup>すること

「明日、明鹿と試合できるのを楽しみにしている」

くぐもった声で言った。「遊晴も、今日俺が試合後にかけた注<sup>7</sup>発破で奮起するだろうからな。あいつも俺と同じくらい負けず嫌いだ」

僕は少し笑って、そうだね、と返す。和泉の言う「明日の明鹿との試合」に、僕は出ているんだろうか、と一瞬そんな疑問が頭をよぎるが、すぐに払<sup>はら</sup>いのける。

「また明日」

僕が言うと、和泉は礼儀正<sup>れいぎただ</sup>しく目礼した。僕はトイレを出た。暗く静かな廊下<sup>ろうか</sup>を歩きながら、記憶を辿<sup>たど</sup>る。

決してバレエを離さない。

似たような言葉を最近聞いた気がする。いや聞いたというか、どこかで見たような。

細かい雨が窓を叩<sup>たた</sup>く。僕は足を止め、冷たい壁<sup>かべ</sup>にもたれて考えた。窓の水<sup>すい</sup>滴<sup>てき</sup>は徐々<sup>じょじょ</sup>に集まって大きくなって、滑<sup>すべ</sup>り落<sup>お</sup>ちる。

(坪田侑也『八秒で跳べ』文藝春秋による)

1——線①「『よくわかったね。僕のこと』とありますが、この時「僕」はどういう気持ちでしたか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 試合にはほんの一部しか出場していない「僕」を和泉がしっかりと記憶していたことに驚き、そんなはずは無いと戸惑いを感じている。

イ 相手校の選手を全員覚えるという努力を怠っていた「僕」は、そうした努力を続けてきた和泉に驚き、感動をおぼえている。

ウ 試合で少し対戦しただけの相手のことなどは普通なら覚えていないはずなのに、和泉が「僕」を覚えていたことを意外に思っている。

エ 試合中とは全く違う姿であるにも関わらず、すぐに「僕」を認識した和泉のするどさに対し、感心している。

オ 自分は一流の選手でありながら、平凡な選手である「僕」とも対等に付き合おうとする和泉の謙虚さに感銘を受けている。

2——線②「和泉くんは遊晴と全然タイプが違った」とありますが、和泉と遊晴の人物像としてふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で書きなさい。

ア 負けず嫌いで、バレーボールを楽しむながらも勝ちにこだわり、努力し続けた人物

イ 負けず嫌いで他人より劣っていることが我慢できず、周りから浮いていても気にせず努力し続けた人物

ウ 負けず嫌いで自らの弱みを誰にも打ち明けられず、誰よりもバレーボールを楽しむ姿を演じ続けた人物

エ バレーボールをする中で普通は避けて通れない悩みや苦しみを感じるものない、鈍感な人物

オ バレーボールを誰よりも楽しんでいて、周囲に苦しみや悩みなどを見せることが一切ない人物



5 — 線⑤「和泉の喉元からまた、くつくつと聞こえた。」とありますが、どういうことですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 試合中に反省や後悔といった苦しみを感じるのはおろかなことであるが、それでも構わないと開き直っている。  
イ バレーボールについて悩むことがよくあるのに、悩みなどないと思われることをおかしいと感じている。

ウ 試合についての反省や後悔を繰り返している自分のあり方を肯定し、そのままいいのだと自信を持っている。

エ 試合中に悩まないからといって悩みがないわけではないことを理解していない「僕」を見下している。

オ バレーボールを始めてからずっと一人で悩んでばかりいる自分の弱さを認め、自己嫌悪している。

6 — 線⑥「ぱちり、と頭の奥でなにかが弾けた感覚」とありますが、どういうことですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 自分にとって一番大切なことに気づいたということ

イ 和泉の本当の思いにやっとなぐることができたということ

ウ これまでに無かった新しい考え方をひらめいたということ

エ 自分がずっと思っていたことを後押しされて、心強く感じたということ

オ ずっとかくされていた真実を発見することができたということ

⑤ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

小学生の頃の忘れられない友人にケンジがいる。僕の通っていた小学校は、田んぼが広がる古い農村地帯と新しい市街地のちょうど中間に位置しており、ケンジは田舎側に住んでいた。僕は市街地側の住人だったが、放課後は家に帰ってから毎日のように自転車飛ばして、ケンジの家に遊びに行った。自転車で20〜30分ほどはかかっただろうか。小学生にとっては決して近い距離ではなかったが、①ケンジと遊ぶことは僕にとって何か特別なことだった。

彼は田舎育ちで、優等生とはあらゆる意味で対極にあったが、山や川や海や、そういった自然の中で遊ぶための知恵を本当に宝石箱のようにたくさん持っていた。僕は小さい頃から虫が好きで、自宅の近くでクワガタなどが採れる木や場所をいくつか見つけていて、夏になるとそんな自分の縄張りを巡回するのが日課だった。ただ、そこで採れるのはコクワガタが主で、ヒラタクワガタでもいれば大物だった。しかし、ケンジはノコギリクワガタ、特に水牛と呼ばれる大あごをもつタイプやミヤマクワガタ、そしてまるまるとした大型のカブトムシの幼虫などが採れる場所をいくつも知っていた。それはもう羨望という言葉でしか語れないものだった。川に行けば、ウナギの取り方とか、海に続く河口近くでボラを捕まえる方法や、山にいけば、アケビやニッキやマモモやキイチゴや、そんな食べられる植物がどこに、いつ行けばあるのか熟知していて、僕に教えてくれた。

ケンジはいろんな②「冒険」にも僕を誘ってくれた。僕が住んでいた町には射爆場と言って、自衛隊の戦闘機が射撃訓練を行う砂浜があったのだが、ケンジはそこから遠くない松林に忍び込める場所を知っていて、そこに流れ弾として落ちてくる機銃の弾や薬莖などを時々拾いにいった。もちろん訓練が行われていないことは確認していたが、流れ弾を拾えるということは、そこに銃弾が飛んでくるということを意味しており、ドキドキが止まらなかったことを覚えている。

またある時、ケンジが「面白いものが落ちている場所がある」と言って連れて行ってくれたのは、彼の家の近くにある神社だった。彼はその神社の床下にささっと忍び込むと、懐中電灯を持って床下を這って行った。たぶん賽銭箱の後ろ側にあたる場所だと思うのだが、そこに到着すると、ケンジは「ここちよつと掘ってみ」と言った。言われた通り地面を少しだけ掘ってみると、なんとそこから注2寛永通宝などの古銭が出てきたのだ。江戸時代の人々が投げいていたお賽銭がこぼれて落ちてきたものと思われたが、賽銭泥棒のようにドキドキもするし、何より江戸時代の人たちとつながったようで、とてもワクワクした不思議な気持ちになった。忘れられない思い出である。

父親の仕事の都合で、小学校5年生の時に僕はその町から転校することになり、その後、中3の時に九州から青森にさらに転出



することになった。一回目の転居後はまだケンジとつながっていたが、青森に引っ越した後は年賀状を出しても返事が来なくなり、音信不通となってしまった。それから長い時間が経ったが、ケンジとの思い出はずっと心にあり、今から4〜5年ほど前だろうか。九州に帰省した際に思い切ってケンジの家を訪ねてみた。連絡先も知らないので飛び込みであつたが、昔自転車で毎日のように通った懐かしい道をたどり、彼の家まで行ってみたのだ。

おそらく40年ぶり以上になるだろうか。訪れたケンジの家はもう跡形もなく、ただの荒地地になっていた。呆然とした。かつては何もない農村地帯だったその地区には大きな国道のバイパスが通り、その道路沿いにはイオンモールができて、ケンジと駆け巡った里山も一部は切り開かれ面影もなくなっていた。それは本当に大きな「喪失感」であつたが、感傷、と呼ばれるべきものなのかもしれない。ただ、<sup>③</sup>その自分の中に湧き上がる、どうしようもない感情を僕は整理しきれずにいた。

人は皆、生まれ持った土台の上に、自分が経験してきたことを積み上げながら生きている。だから、人の半分はその人が経験したこと、そう「思い出の地層」とでも呼べるような、積み重なり沈着していった堆積物のようなものでできている。そうなのだ、今の自分の本当にコアな部分は、あの頃、ケンジに教わったことでできているような気がするのだ。僕が生物学を志すようになったのは、元々の指向性もあつたとは思うが、あの頃感じた生き物の面白さや生き物と触れ合うことの喜びがベースになっている。生真面目な部分はあるのだが、どこかで「真面目なんて糞くらえ!」と思っっているような、僕の少しはみ出したところも、あの頃の「冒険」が、今も僕の中に確かに存在している証だ。ケンジは、自分が知らない世界、それまでの自分を作り上げてきた本や図鑑や野球やドッチボールやボードゲームやビー玉といったものとは違う、その外にある世界への入り口だった。

<sup>④</sup>感傷、とは何なのだろうと思う。感傷主義は批判的に語られることも多い。それは感情の動きに溺れ、何ら生産的なものを生み出さない行為に映るからだろう。失くしたものを嘆いてみても、それは戻らない。無意味で無駄なことである。だから、そんなことよりも、それを受け入れ建設的な一歩を踏み出すべきだ。それはその通りであらう。

ただ、<sup>⑤</sup>そういった太陽の下でキラキラと輝くような合理性に、僕はどこかで小さな違和感を持ってしまうのだ。ではたとえば、亡くなった人のために祈ること、その人との約束を守り義理を果たすようなことは、この世で一番「無意味で無駄なこと」なのだろうか? 「死んだ者のために、祈って何になる?」、それが正しい考え方か?

亡くなった人のために祈ることは、その人と過ごした時間や記憶を大切に思うことである。そこから何かの気づきを得る、あるいは何かに立ち向かうための勇気を得る、そういったこの世に何かの影響力を生み出す限り、その人はある意味、まだ「生きてゐる」のだ。祈ることで、亡くなった人と僕たちはつながり、まだ共に生きていくことができる。感傷とは、自分の大切なものを反芻するように、そう噛みしめては戻し、また戻しては噛みしめるように、想う時間なのだと、僕は思う。人は経験で自分を作っていく。しかし、それが血肉となり、自分のコアな地層となるためには、それを噛みしめ、味わい、自分の中に定着させるような時間が必要なのだと思う。自分にとって大切なもの、簡単に整理することができないものと、何かの結論を出さず、出せず、ただ共にある状態を感傷と呼ぶのなら、そう呼ばばいい。この小文は、その「無意味」と「無駄」の中から生まれてきたのだ。

幸福な時間、愛しい時間。それはいつもすぐに過ぎて行く。ケンジと過ごしたあの日々もそうだったのだろう。その中にいる時は、それが幸せだと気づかないようなことも、失くした時に気づくのだ。子供が小さい頃、布団にもぐり込んできて、よく一緒に寝ていた。その小さな体を包みながら「もう少しだけ、この幸せな時間を、僕から奪うのを待ってください」と、いつも神様に願っていたものだった。しかし、時は過ぎていく。

振り返れば、喜びの時はいつも一瞬である。そこにいつでもあるように思えても、気づけば、もう手のひらからこぼれ消えている。だから、幸せな瞬間は、あるいは悲しみの瞬間でさえ、人にとっても大切なものなのだ。それを手にできたこと、それが本当にかげがえのないことなのだ。人生で得られるものには、お金や地位や名誉や、いろんなものがあるだろう。しかし、自分の人生で何を体験し、その中で自分をどれだけ発露できたか。そして、そこで味わった気持ちや感情を自分の血肉にできたか。それ以外、最後まで自分に残るものはない、と僕は思う。

そう、それが ⑥ 人生で、<sup>注5</sup> 一等、上等なものなのだ。

(中屋敷均『わからない世界と向き合うために』筑摩書房による)



- 注1 羨望 Ⅱ うらやましいという気持ち  
 注2 寛永通宝 Ⅱ 江戸時代の通貨の一つ  
 注3 バイパス Ⅱ うかいのための道路  
 注4 コア Ⅱ 中心となるもの、核  
 注5 一等 Ⅱ もっとも

1 ———線①「ケンジと遊ぶことは僕にとって何か特別なことだった」とありますが、それはなぜですか。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

- ア ケンジの住む田舎側は、「僕」の家からは遠く、行ったことのないところがたくさんあったから  
 イ ケンジは優等生ではなかったため、優等生の「僕」が苦手なことを主に得意としていたから  
 ウ ケンジは「僕」しか友人がおらず、ケンジの遊び相手になれることは優越感<sup>ゆうえつかん</sup>を持てることだったから  
 エ ケンジは生物に対する知識をたくさん持っていて、本や図鑑に書いてあることは何でも知っていたから  
 オ ケンジは僕の経験したことのない部分の経験が豊かで、「僕」に魅力的な<sup>みりょくてき</sup>ことを教えてくれるから

2 ———線②『冒険』とありますが、「僕」はどのようなものを「冒険」と考えていますか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

- ア だれも立ち入ったことのない場所に入りこみ、新しい発見をすること  
 イ 身の危険を顧み<sup>かえり</sup>ずに突き進<sup>すす</sup>み、恐怖や緊張感<sup>きんちやうかん</sup>を体験すること  
 ウ 非日常的な空間に身を置き、自分の生活とかけ離れた世界に触<sup>ふ</sup>れること  
 エ 貴重な品物を手に入れて、その品物の持つ長い歴史に触<sup>ふ</sup>れること  
 オ 見たこともない宝物を手に入れるために、自分を犠牲<sup>ぎせい</sup>にすること

3 — 線③ 「その自分の中に湧き上がる、どうしようもない感情」とありますが、その具体的な内容としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 自分が大好きだった田舎の田園風景が都市開発で破壊されたことに対する憤り

イ 自分だけがケンジとの思い出を大切に思っていたことを知ったことによる悔しさ

ウ どんなに会いたくても、もう二度とケンジには会えないのだという寂しさ

エ 少年時代には二度と戻れず、懐かしい思い出もいつか消えていくことを知った苦しさ

オ 今の自分の本質を形成した思い出の手がかりとなるものが消えたことに対する悲しみ

4 — 線④ 「感傷」とは何なのだろうと思う。」とありますが、この文章中で「感傷」とはどのようなものだと言っていますか。「ただ共にある」ということはを用いて、四十字以内で書きなさい。

(下書き用)


5 —線⑤「そういった太陽の下でキラキラと輝くような合理性に、僕はどこかで小さな違和感を持ってしまふ」とありますが、これはどのようなことを言っていますか。ふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 合理的にみえるものほど、実は合理的ではないものが多いと不信感を抱いている。

イ 合理的なものには確かに価値があるが、自分にはその価値が見いだせないと思っている。

ウ 合理的なものばかりが注目を集めるが、異なるものの良さが忘れられていると感じる。

エ 一般的に合理性があると考ええるものは、道徳的にはよくないものであることが多いと思う。

オ 一般的に合理性があるといわれるものは、僕の個人的好みとは合わないと思う。

6 —線⑥「人生で、一等、上等なもの」とありますが、これはどのようなものだと語られていますか。次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 自分の将来を決定づけた思い出

イ 大切な人と一緒にいた幸福な時間

ウ 血肉となる感情を呼び起こす経験

エ 悲しみから一歩踏み出す勇氣

オ 少年時代の友人と味わった気持ち

7 次の文の中で、文章の内容と合っているものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 「僕」は最初、自分が採ったこともない昆虫こんちゅうを採ることができるケンジをねたむ気持ちを持っていた。

イ 一回目の引越しては、「僕」はケンジを懐かしく思っていたが、二回目の引越して彼を忘れていった。

ウ 「僕」が生物を好きになり、生物を研究対象とするようになったのは、すべてケンジのおかげである。

エ ケンジの家や二人で遊び回った場所がなくなっていたことを引きずるのは良くないと「僕」は思っている。

オ 亡くなった人のために祈るという一見無意味な行為は、自分がそこから影響を受ける重要な行為とも言える。

(問題はこれで終わりです)